
た俺が女体化した友達とゲームの世界で奴隷(+ 幼女)ハーレムと一緒にオワタ式で冒険しに逝く

低学歴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生でチートと化した俺が女体化した友達とゲームの世界で奴隷（+幼女）ハーレムと一緒にオワタ式で冒険しに逝くけど質問ある？

【Nコード】

N0941BA

【作者名】

低学歴

【あらすじ】

ちゃんとしたMMO物だと思って読むと後悔します。

あと、真面目に書いていません。表現の使いまわしなどがあり、非常にセリフだらけです。

小説じゃなくて台本だろこんなもん！と発作が現れる方はブラウザバックをポチッとな。

ある日、体感型ゲームを買い、プレイしていた俺と友達。

気がつくと……死んでしまっていた！

まあ、神様の計らいで転生させてもらえました。
チート能力を俺に与え、友達はゲームキャラの容姿を受け継いでいた。

しかし、神様はとんでもない条件を出しやがった。

「一発でもダメージ受けたら死ぬから」
転生先は、さつき死んだゲーム！？

途中で、なんやかんやで破壊神を倒すと、なぜか幼女になりやがった。

力がなくなったと？

責任とって！ と勘違いされそんな危険発言を言いつつ、俺についてきやがる！

とまあ、そいつから奴隷の店を教えてもらい、奴隷を買ったわけだが。

俺 ツンデレお姫様（嬢王様に覚醒するんだが）

友達 巨乳クーデレ（友達が気持ち悪くてドン引き）

破壊神 眼帯つけたペタンコ女の子（見ててなごむ）
を買いましたとき。

あれ？ すでに、パートナー決まってね？

体感ゲーム始めました（冷やし中華始めました的なニュアンスで）

まずはタイトルについて触れようか。

うん、そうなんだ。

これはテンプレを詰め込みすぎて、いったい何がしたいのかわからなくなった……

いわば、神々の遊び？ という奴なんだ。

いまさら謝って許してもらおうとは思っていない。

けれど、君はこのタイトルを見た時、こっ「ヤリスギ」みたいな物を感じたと思うんだ。

一撃で死んでしまうという荒んだ世界で生きていく主人公を見ていても、その気持ちを忘れないでほしい。

じゃあ、まずは質問を聞こうか。

……。

超立体感型ゲーム「俺の勇者がこんなになめらかに動くわけがない」を購入した、俺「北田広太」と、友達「長谷圭吾」。

二つのダンボールが、パンパンに膨れているのを見て、俺たちは顔がほころんだ。

「なあ、広太。これ、どういう風に動くんだろうな？」

いつもは冷静な圭吾が、足踏みしながら訊ねてくる。

もちろん、俺もバタバタと足踏みしながら答える。

「きまつてんだろ。あれだよ、あれ、ナメクジ？」

「なめらかどころのレベルじゃねーよ!!!」

的確なツツコミに満足して、俺は早速ダンボールを開けた。開けたと同時に、ゲームがドサツと盛り上がり、溢れてくる。隣に目を向けると、圭吾の方はすでに腕に手袋をハメていた。

それにならい、俺も着けていく。

足は、長靴を素足で履かされたような感触の靴下だった。その上に更に靴を履く。

それだけで、狭い部屋の中をバツク転するほど興奮していた。もちろん出来るはずもないので、床に頭から激突してもんどりうっていたが。

圭吾は、そんな俺に冷ややかな視線を送りつつも、頭に取り付ける装置みたいなのをかぶった。

頭の三倍はありそうな大きさに、丸いフォルム、真っ黒なデザインが光る物だった。

「パソコンに繋がればいいのか？」

首が折れるんじゃないか、と考えてしまっほほどデカイ装置をかぶりながら、圭吾は言った。

俺はそれに頷く。

「なあ、どうなんだ？」

更に圭吾が言ってきた。

しつこい。

また首を縦に落とす。

「いや答えるよ!!!」

「だから頷いてんだろ!？」

「見えるわけねーことぐらい想像しとけよ!!」

「だったら千里眼ぐらい持っとけ!!」

「無茶言つなよ!?!」

宇宙飛行士のヘルメット（のような物）をかぶった男と、頭にタ
ンコブを付け、手足に変な手袋足袋を履いている男が喧嘩するとい
う、かなりシュールな光景になっていた。

とりあえず、俺も宇宙飛行士のヘルメット（のような物）をかぶ
る。

「おい」

圭吾が、少し苛立った声で言った。

「なに?」

「ちよつと、パソコンに繋げてくんね?」

「あー、俺もかぶってるから無理」

「なんでだよ!? ええ、なんでかぶってんのお前まで!?!」

「いやあ、小さい頃の夢が飛行機のパイロットでさ」

「全然関係ないだろ!!」

「こつという服装に憧れてたんだよねえ」

「お前、全世界のパイロットに謝ってこいよ!!」

「じゃあ……行こうか、ハネムーン」

「ツッコミきれねえよ!!」

「あ、分かんない? ハネムーン、^{ムーン}月。で、今宇宙飛行士の格好み
たいじゃん?」

「分からなくもないけど一旦黙ろうか……?」

さんざん圭吾を小馬鹿にしたところで、ようやくヘルメットを脱
いだ。

俺は清々しい顔をして、窓から見える青空を覗く。

「……やっと帰ってきた。俺の故郷、地球」

「さっさとしろ馬鹿!!」

そろそろ圭吾が、ヘルメットをかぶったまま殴りかかってきそうなので、パソコンを立ち上げた。

正直、後ろでデカくて真っ黒なヘルメットをかぶった男がうるちよろしているというのは、かなり不安だ。

というか、不審者だ。

外から家の中を簡単に覗ける構造になっていたら、今頃警察が来ているところだろう。

二代のパソコンに、付属のケーブルを差してゲームと繋げる。

更に、自分たちに着けている手袋などから伸びているコードも繋げて、準備完了だ。

「起動、っと」

「うほっ!」

圭吾が、なにやら気持ちの悪い声をあげた。

さっそく俺もヘルメットを着けてみる。

あれ、なんにも見えない。

「圭吾、なんにも見えないんだけど、これどうなったんの」

「おま、逆だろソレ」

「あっ」

クルツ、とヘルメットを180度回転させると、目を細めてしま
うほど眩しい光が俺の視界を射た。

目が慣れてくると、目の前にはゲーム画面が広がっていた。

タイトルが浮かんできて、下に制作日時などが細かく書かれている。

グラフィックも細かく綺麗で、完全にリアル世界だった。

「うほおおおおお！」

歓喜の声をあげる。

隣から「キモッ」という言葉が聞こえた気がするが、気のせいだ。手を上げてみると、ゲーム画面にCG化された俺の腕が出現して、動いている。

「おお！」

次に足を上げてみると、これもゲーム画面に出てきた。

「おおお！」

スタート、と書かれた部分をCG化された指でタッチすると、セーブデータを確認する画面へと映り変わる。

「おおおお！！！」

「うっせえ黙れ！！！」

友人の怒号に絶句しつつも、その臨場感に俺はドッキリとはまり込んでいた。

新規データをタッチ。

すると、男のキャラクターが上半身裸、下半身はブリーフ一枚で現れた。

名前欄には「無職のプー」と書かれている。

「なんでプー!?!」

「無職ってなんだよ! 明らかにゲーム買った奴に喧嘩売ってんじやねーか!?!」

俺たちは健全な男子大学生です。

「圭吾、お前キャラクターどうすんの?」

顔メイクなどをいろいろいじりながら、聞いてみた。

「ああ、女の子にするけど?」

「止めとけて……。声でどうせバレるんだから」

そう。これは音声対応だ。

やり方によっては、上手く声を無くし、チャットのみも出来るが、ネカマ防止用ということで普通では外せない……らしい。説明書に書いてた。

……説明書の最後のページに「女の子だと思ってたらオッサンだった。絶対に許さない許さない許さない」と、呪詛よろしく書き連ねられていたのは目の錯覚だろう。

「決めたか?」

「おう、決めた」

「サーバーどうする?」

「んー、2の3にしようぜ」

「キャラの名前は? こっちは『圭子ちゃん』だけど」

「うわあ」

「なにその反応」

「大丈夫。引かないよ、俺は」

「分かったから。んでお前、名前は?」

「『暗黒より深淵を覗き闇に身を委ね光を求めながらも避ける強き力を持ちながらも弱い心を持つ孤高の狩人ワールドデスライダーアームズ』

「痛い！！ 中高と部活に入ってたクセに、いきなり作詞作曲をやりだして、自分ポーカーで他のメンバー募集してる奴並みに痛い！！」

「相当じゃねーか！」

あんまりすぎる例えにツツコミながらも、俺はゲームを始めた。

フューチャークエスト

現れた我が分身は、とてつもなく格好良かった。

髪型はFFのクラドみたいだし、服装はアークラッド3の主人公みたいだ。

今、俺は自分のステータス画面を見ながら、ひたすらに自分の格好さに酔いしれていた。

「よっ」

馴染みのある声が聞こえ、ステータス画面を閉じ、辺りを見回す。後ろに振り返ると、美少女が立っていた。

髪はポニーテールに結んでいて、茶色という無難な形。顔もなかなか好きなグラフィックで、ドキリとした。

「どうした？」

あ、声キモい。

「なにがキモいだ！ お前も全く似てねえじゃねえか！」

「いや、これが俺の真の姿さ」

「ゲームでしか表現できない真の姿に泣け」

「おいおいおい」

「やっぱ止める」

「はい」

さすがに、この姿で泣いているというのもかなり情けない。

格好良すぎて、むしろダサイ。

街の中へ入る道の途中、圭吾のキャラクター「圭子ちゃん」が話

しかけてきた。

「お前見つけるの、めちゃくちゃ簡単だったわ」

「あ、やっぱり似てるから?」

「んなわけねーだろ! その長ったらしい名前を見る!」

確かに、俺の名前はかなり長い。

三人称視点に戻すと、名前が画面端まで届いていて、全部読めなくなっている。

「なんて呼べばいいの? お前のこと」

「暗黒より(〳〵中略〳〵)スライダーアームズだからあ、『セイントセイバー』って呼んでくれ!」

「なんで暗闇の戦士のあだ名がセイントセイバー!? 真逆だよ、それ!？」

「固いこと気にすんなよ。『敬遠する神にも少なからず情を持ちトドメを刺さなかったために奈落へと突き落とされ神に復讐を誓う男ちゃん』」

「なっげえ!! 長いうえに、違和感ありすぎだわ! なんで無理やり『ちゃん』付けたの!？」

「いやあ、可愛らしさも必要かな、と思って」

「これっぽっちも可愛くねえよ!!」

などと楽しく談笑していると、見るからに受け付けですよーな場所に着いた。

カウンターごしに微笑むお姉さんに、俺はウィンクしつつ、

「今夜、君の受け付けに俺を入れさ」

「それ以上は止める」

「はい」

圭子ちゃんに首根っこを鷲掴みにされ、しぶしぶ引き下がった。
しかし受け付けのお姉さんは、やはりCPUらしく、嫌な顔一つ
せずに言う。

「ギルドへと加入なさりますか？」

「あ、はい」

圭子ちゃんが受け答えしている。

「なら、こちらにサインしてください」

「はい」

スラスラつと圭子ちゃんが紙に文字を書き終わると、お姉さんが、

「では、説明をいたします」

省きます。

「フューチャークエストを楽しんでいてくださいね！」

彼女に笑顔で見送られ、俺たちはその場を後にした。

……。

「で、まずはクエストを受けるわけだが」

相変わらず、顔に似合わない男声で圭子が話す。

掲示板には、ザツ、と多数のクエストが貼られていた。
どれも初心者向けの物しかない。

「どうする？」

かわいい顔を傾げさせて訊いてくる。
もちろん、

「寝る」

「なんでだよ!？」

「いや、セーブのやり方ってクエストがあるからさ」

「あ、ああ」

俺が指差すと、ようやく圭子は理解したらしく、苦い顔をしながらも頷いていた。

内容は、ただ寝るだけ。寝ることで、セーブと回復を完了すれば
オーケーという、比較的簡単なものだ。

「で、寝る場所どこよ」

圭子がステータス画面を開いたらしく、彼女の体が、まるで時間
が止まったように固まり、そしてうつすらと青くなった。

地図を開いているのだろう。

「圭子ちゃん、もしかして寝るって……俺と？」

「なんで恥ずかしそうに言うんだよ! 気持ち悪いわ! 違うから
ね? 寝るって意味、全く違うからね!？」

「うん……分かってる。圭子ちゃんが、素直じゃないことぐらい……」

「なんで女の子キャラのオレより女々しくなってるの!？」 顔グラ

イケメンだから、余計にキモいわ!!」

「うん……初めてだから……ね？」

「声ちよつと高くすんな」

「うい、分かりやした」

「今度は声低くすんな! 楽し ごかお前は!？」

「ハブ注入」

「なんつーもん注入してんじゃボケ!!」

ポカッと頭を殴られて、少しばかりHPが減ヒットポイントってしまった。

フレンドリーファイアありかよ……。

説明しよう!

フレンドリーファイアとは、いわゆる仲間に対して攻撃をあてることである!

よくFPSなんかにフレンドリーファイアがあるが、友達とやるならともかく、不特定多数の人とやる時はオフにしておこう!

正味、仲間から攻撃されて死ぬなんて、無様以外の何者でもないしな!

「さてと、んじゃ寝ますか」

「優しくしてね……?」

「黙れカス」

2LDKの住まいを、俺と圭子は手に入れた!

ダブルベッドに寝転がる。

男キャラである俺は、よくいびきをかいていた。

逆に、女キャラである圭子は全くいびきをかかず、丸まって眠っていた。

俺はガバツと起き上がる。

「襲ったらリアルで殺す」

圭子から聞こえたドスの利いた声で、俺はパタリとベッドに倒れた。

しかし、眠れない。

「二度寝できないみたいなんだけど」
「知るか」

もうクエストクリアなのだが、いかんせんHPが全然回復していない。

圭子はドンドンとスタミナを回復していく。
ふと、思いついたことを言ってみる。

「おっぱい揉ん」

「寝ろ」

「あいとういままてん」

また倒れる。

あと十秒で、圭子は起きる。

「ねえ、揉むくらい」

「殺す」

残り五秒。

「あっち向いてホイ、しょうか」
「ブチコロス」

だんだん、圭子の声に抑揚が無くなってきた。

残り……二秒!

ムラムラ……ムラムラ……ムラムラ……。

「今じゃあー!」

「失せる犯罪者ー!」

俺が圭子に襲いかかると同時に、彼女は『寝る』を完了しており、起きていた。

彼女は伸ばしていた俺の腕を掴み、そのまま投げとばす。

「うげっー!」

俺は壁に激突し、大の字になったままスルスルと落下した。

圭子がパンパンと両手を叩く。

「ふん、だてにメタ ギア3はやりこんでねえよ。見よう見まね、CQCだゴルア」

「い、いつの間にそんな技を……」

またHPが減った。

そろそろ危ない気がする。

「そろそろ行くぞ、犯罪者」

「こういう体力の時……どついうポケすればいいか分からないの」「死ねばいいと思うよ」

にっこりと、残酷に微笑む圭子に引つ張られ、住居を出た。

……。

ふと、住居を出た俺たちは、路地裏から声がするのを聞いていた。発声源に近づくと、なにやら顔グラがイケメンの二人が、小声で話をしている。

「ドユフ……ち、チート使って……さ、さっさとクリアしようぜ」
「オブフォ……そうでござるな……フヒヒ」

圭子よろしく、顔に似合わない脂ぎったような声を聞いた瞬間、鳥肌が立った。

「……おい、犯罪者」
「……なんだよネカマ」

さすがにずっと犯罪者呼ばわりされると、反抗意識も湧く。
圭子から歯をこすらせたような、怒りを必死に我慢しているような音がした。

「……いいか、運営にこのことを知らせるんだ。あいつらのIDと名前は覚えたか？」
「……ああ、アニメキャラの名前だから、簡単に覚えられたぜ」
「なら、行くぞ」

と、きびすを返して走り出すと、

圭子が何も無い場所ですっころんだ。

「うっふお!?!」

なんとも似つかわしくない悲鳴をあげて、ゴロゴロと転がっていき。

その悲鳴に気づき、先ほどのイケメン二人がこちらを振り向いた。

「見たなコイツら!」

ぎこちない走り方で迫ってくる。

吹き出しそうになるが、なんとかこらえて、圭子を立ち上がらせた。

「大丈夫か!?!」

「……すまない、しくじった」

それにしても、

「ふっほっふっほっ」

「はぁ……はぁ……ヒュー」

……あいつら、おっせえなあ。

俺たちはすぐに走り出し、一気に距離を空ける。

余裕だ。全然余裕だった。

あいつらはとっくに見えなくなっていた。

「はは、ざまあみ」

言葉の途中で、俺の意識が途絶えた。

はい死んだ今君の気持ち死んだよ

ふと気がつくと、一面が真っ白な空間に立っていた。
いや、真っ白だけではない。

バニラのように、ほんの少し黄色がかった白だ。
足元……地面が、雲みたいにフワフワしている。

「あ、あつれえ？ おつかしいぞお」

頭の上に、なんか輪っかみたいなのが浮いてるし、心なしが俺の
体も浮いてるような……。
つつか、ここどこだ？

「はい、次の人」

「ぬおっ!？」

いきなり、俺の立っている地面が動き出した。動く歩道みたいだ。
ウィーンと機械音を響かせつつ、どんどん前へと進んでいく。
すると、目の前に、なにやら椅子に腰掛けた爺さんがいた。

「えーっと。死人ナンバー9865の……北田広太さんね」

ガタンと、俺の足場が止まった。

次に、隣からウィーンと音がする。

「あれ、広太？」

呼ばれ、振り向くと長谷圭吾（現実の姿）が、動く歩道でこちら
へと近づいてきていた。

そして、俺の隣でガタンと止まる。

「君ら、あれだよ」

爺さんが、すごく面倒くさそうに話す。

「ゲームやりすぎるのも別に構わないけどね。ハシャギすぎるのも問題だよ？」

「あ、すみません」

反射的に謝ってしまった。

「死因が大型トラックとの衝突。しかも二人同時に。なんか変なヘルメット着けてたから頭大丈夫だったけど、首が、もうバツキバキに折れてんだから」

「は？ 死因？」

「あ？ なに言ってるの。死んだじゃん、君ら」

「えっ？ ええええええええええええ！？」

「まあね、いつの間にか死んでる人つて、みんなそういう顔するから。もう慣れたし。……ああくつそ閻魔の野郎、なんで俺が死人裁かなくちゃいけないんだよ死ね。……なにが人が多いだよ、息子は息子で大変なことやらかすしよお。……死ねよカスくそ」

「あ、あほう」

あまりにも険悪なムードなのだが、おずおずと聞いてみる。

「あなたは、誰なんですか？」

「……ウス」

「へ？」

「神々の王ゼウスだよ悪いかよ!!」

「ええええええええええ!!」

いきなりゼウスが立ち上がった。

あの爺さん、ブリーフしか履いてないんだけど。

無職のブーさんそっくりなんですけど。

「王なのにパシられてんだよ悪いかよ!! 俺もさ、ゲームやってたの! なめ勇を!!」

どんな略し方だよ。

「なのにさ、閻魔の野郎がさ。『ゼウスちゃん、手伝って』とか言うからさ。いいんだよ? 別に。可愛いからさ、うん。女の子の頼みは極力断らない主義だから。

でもさ! おかしくね? もう一万人近く相手にしてんだけどさ、暇ないんだよ! 閻魔の野郎、悠々とアイス食ってんの、分かる!? チューパット吸ってたよ!?

普通、アイツから奢るパターンだよな? なのにさあ、あの野郎ロリ顔でへらへら笑いやがってさあ」

突然、ゼウスが自分の座ってた椅子の背もたれを殴りだした。

壁パンならぬ椅子パンかよ。

「うっぜー、マジうっぜー。仕事できない奴の肩代わりとか、マジうっぜーわ。」

わざわざ来てやってさ。一発やらせてくれるとか言うからさ。最近妻とレスってるから、マジ溜まってんだよ。

仕事終わらないしさ。いっみわっかんね、いっみわっかんね。も

うね、俺が社員ならストライキしてるわ。死ねよブラック企業。天国なんてブラック企業に就職しなけりゃ良かったわ
めっちゃ偉いとこまで行ってもコレだよ。結局、誰かに足蹴にされんだよ。もう死のうかな。死んじゃおうかな。人生マジ疲れたわ、いやマジで」

おいおい、なんか関係ないことまで愚痴りだしたぞ。

なんか、死のうの下りから、チラっチラこっち見てくるし。言うてほしいの？ そんなことないって？

「そ、そんなことないですよ」

圭吾が、朗らかスマイルで慰めに入った。

「今だけ頑張りましょうよ。退職する時に、精一杯周りをバカにすればいいじゃないですか。

老後のために、息子さんのために、奥さんのために、まずこらえてみせましょうよ」

さすが我が友人。きれい事を言わせたら右に出る者はいないな。ゼウスが、ちよっと目を潤ませながら俺たちに向き直った。

「分かったよ、うん。ちよっとぐらいなら頑張れるし。別にお前に感化されたわけじゃねえし」

反抗期の中学生ぐらい情けないな、この王様。

「じゃあ、天国か地獄、どっち行くか言うよ、うん」

涙声になりながら、ゼウスが喋ろうとしていると、ゼウスの背後

からスーツ姿の、頭にツノの生えた男が走ってきた。

男はゼウスの横で足を止める。

「ぜ、ゼウス様！」

「ちよつ、決心したのになんだよ。うぜ、まじKYうぜー」

「……ぶち殺したるか糞じじい」

「はい聞こえてましたー、小声俺には聞こえてましたからー。死ぬのはテメエだ糞ガキ！」

「働きもしねえで何言って……違う違う。緊急の連絡があるんです！」

「は？」

男が、胸元から紙を取り出し、ゼウスに見せる。

しかし読ませる間もなく、男は話し出した。

「天国と地獄が一杯なんです！ とりあえず、今は裁かないでおいてください」

「は？ 帰りたいんだけど」

「すみません。それまで、待機ということ」

「はい無理！。もう我慢できないから。帰るし」

「帰らないでください！」

ゼウスが拗ねて、男が服を引っ張って、なんとか引き止めようとしている。

「や、やめろよー！ もう俺帰るし。なにが閻魔だよ。なにが裁きだよ。知るか、全部地獄に落ちとけ」

「そう言わず！ 今だけ、死人を好きな場所に転生させていいですから」

は？ あの糞ガキ何言っちゃってくれてんの？

「まじいいの？」

「はい」

え？ マジですんの？ ちょっと待って。

またゼウスが、元いた椅子に座る。

「確か、君ら『なめ勇』やってたんだよね？」

「はあ、そつすね」

「んじゃ、そのゲームに転生してくんない？ そのの、不細工」

「誰が不細工だ！！」

ゼウスが、生ゴミでも見るような目で見てきて、ついポケずにツッコんでしまった。

「君、その世界で最強の力あげるからさ。いてくんない？」

「え？」

「好き放題できるよ？」

MP無限だし、勇者のスキルは全部習得してるし。あと、魔法も全部覚えてるよ」

「マジっすか！？」

「うん、別にゲームの歴史変わろうと知ったこっちゃないしね。」

あと、そのの……ネカマ」

「的確だがやめろ！」

ゼウスが顎をしゃくって、圭吾を差す。

「女キャラ使ってたじゃん。あのキャラの容姿で転生させてあげる

」よ

「い、いや別にオレは」

「大丈夫大丈夫。チ コは取っとくし、声も可愛くしとくからさ」

「あの、オレは」

「はい決定！ んじゃ、転生させるよ」

バカツ、と俺と圭吾の足場が開いた。

「「え？」」

下を見ると、真っ暗な奈落が広がっている。

ふっと浮遊感が俺を包んだ。

「あ、言い忘れてた」

ゼウスが、俺が落ちる寸前に思いついたように言い出した。

「不細工の方は『一発でもダメージ受けたら死ぬ』から、気をつけてね」

「ちよつと待つ。先に言えええええええええええ……」

文句をつける前に、俺は底なしの奈落へと落ちていった。

ダンスの角に足の小指ぶつけたら死ぬ程度の体力

「ん……ああ？」

目が覚めると、青空が視界いっぱい広がっていた。

種類も分からない鳥が群れをなして飛んでいく。ときおり聞こえる鳴き声は、俺のいた世界の動物には出せない音だった。

体を起こすと、平原のはるか先に山が連なっているのが見えた。

こちらは俺のいた世界と同じ、森林に覆われて、深緑に染まっていた。

どこか違う。

異世界？

「うう……ん……」

呻くような声で、首を横に向ける。

そこには、雑草の布団の上で丸まって眠る美少女がいた。

顔は鼻が整っていて、日本人を基調としていながらも、西洋風の顔も見せる不思議な顔だった。

髪型はふんわりとした印象を持つポニーテールで、茶色に少し黒が混じっている色をしている。

服装はかなり軽装だ。上は白いシャツ一枚で、肩までしか無い。

膨らんだ胸が、腕を通す穴のから覗ける。下はジーンズパンツだ。

すやすやと、心地よさそうに寝息をたてる彼女を見ていて、ふと俺は気づいた。

「圭吾のキャラにそっくりじゃね？」

そっくり、というよりそのままだ。

始めた時の圭吾のキャラはCG色が強かったため、この美少女と似ているということに気づくまでに時間がかかった。だが、目の前の美少女は、あの姿を更に鮮明にしたようでもある。

とにかく、まずは起こしてみ確認しないことには確証は得ない。

「あの〜」

肩を掴んで、出来るだけ優しく揺する。

すると、美少女は目をうつすらと開けて、両手で目をゴシゴシと拭きだした。

「なに、どうしたんだ広太」

「あ、やっぱり圭吾か……」

この喋り方は間違いなく圭吾だ。だてに長年友人をやってはいない。

しかし、声はとても高く、女の子そのものだった。アニメ声、という表現の方が合っているだろう。

圭吾は起き上がり、一つ大きなあくびをすると、目を半開きにしつつ、こちらを見た。

と思ったら、吹き出した。

「な、なに？ お前の格好、キモッ！ アーハハハ！」

「よく自分の姿を確認してから言おうか」

「えっ？」

俺の親切な注意に、圭吾はやっと自分に起きたことに気づいたらしい。

一度自分の膨らんだ胸に視線を落としたりと、何度か胸を揉んだ。シャツが胸のシルエットを映し出していて、妙にエロい。

「お、女になってる?」
「そうだよ。顔も美少女と来てる」
「は、はは。何かの、間違いだろ?」
「なら鏡探してこいよ。いろいろ捗るぞ」
「鏡探すまで捗ってないけどな」

覇気のないツツコミをしていても、まだ圭吾は自分の胸を揉んでいる。

さすがに、俺もドン引きしていた。

「そんなにおっぱい揉むのが楽しいか?」
「ちげえよ。シリコンが入ってるなら、偽物かどうか感触で分かるから確かめてんの」
「ほう? お前、本物のおっぱい触ったことあんの?」
「いいや、シリコンのおっぱいなら」

自然に出た圭吾の言葉に、二人して俯いた。
そうだ。モテない男がおっぱいを揉む経験なんかあるわけがない……。
だが、美少女と化した友人で、思いついたことがある。

「そうか! コイツがゲームキャラの姿なら、俺も」
「お前は現実世界の不細工顔だよ」
「シット!!--」

ものの数秒で幻想が打ち砕かれた。
数分間、友人がひたすらに胸を揉み続けるのを見つめているという苦行に耐えていると、圭吾が深くため息をついた。

「残念だが、本物らしい。痛覚まである」

「気持ちよくなってきた？」

「エロアニメの見過ぎだ」

「お前もそうだろう」

「オレは女の子になったからな。もう女の子の気持ち分かるのさ」

「なに言ってるんのキモい。生涯休まず生理痛になればいいのに」

「おい止める。妹の生理痛を見たことあるが、あれ、もう喋れなくなるレベルだからな」

「ほう？」

「ずっとトイレから喘ぎ声が聞こえるって、聞いている側からしたら結構つらいぞ」

「録音は？」

「してねえよ」

俺の変態発言に、圭吾の可愛らしい顔が睨んでくる。

そこまで怖い顔ではないため、睨まれてもどうということはない。むしろ、微笑ましいくらいだ。

「そろそろ出発しよう」

と言って、圭吾が立ち上がった。

その行動に俺は首を傾げる。

「どこに？」

「泊まれるところを探すんだよ。野宿ってわけにもいかんだろ」

「それもそうだな」

俺も立ち上がり、うんと伸びをする。

体の節々が固くなっていて、動かすとパキパキと音が鳴った。筋肉が伸縮する感触が気持ちいい。

辺りを見回すと、山の無い地平線の真ん中に、小さな柵で囲まれている町が見えた。いくつか鉄でできた家があるのが見え、そこそこ発展しているのがうかがえる。

「ん、圭……吾？ あそこでいいだろ？」

「ん？ なんで名前を言いづらそうにするんだ」

別人にしか見えないからだよ。

「性別変わって、顔も美少女になってるからさ。圭吾って、なんか呼ぶのはおかしい気がする」

「おいおい、ゲームじゃないんだから」

「でも違和感バリバリなんだよ、どうにかしてくれ」

「分かったよ。圭子って呼べばいい」

「いいの？」

「気を使われるのは嫌だしな」

「ありがとう圭子ちゃん！」

圭子の胸に飛び込もうとすると、顔面を掴まれた。

「はい、なんででしょう？」

指の間から視認できる圭子の、笑っているとも怒っているともつかない般若の形相に、俺は縮みあがった。

「なんでもありません」

「よろしい」

圭子の手から開放された。

「まあ、天国が空くまでの辛抱だから頑張ろうぜ。なっ?」

機嫌よく、圭子が俺の背中を叩いた。

広太は死んでしまった!

「なんでだあああああああああ!」

「カンオケに変わってんぞ、お前!」

うねうねと体を曲げると、言われた通り、体がカンオケに変わっていた。

ぴよんぴよん跳ねて叫ぶ。

「どうすんだよ、コレ!」

「戦闘には参加できないけど、一応意識は生きてるんだな……」

縦に立って、跳ねまわるカンオケという図が出来上がってしまった。

軽く化け物だ。

「とにかく、復活させてもらわないと!」

「そのままでもいいだろ」

「良くねえよ!」

「死んだような生活してたくせに」

「今は関係ないね! 俺の冒険はいつだって晴れ時々大荒れ、いいね、いい冒険だよ」

「どっかの名パイロットのセリフを改変すんな」

「圭子お、今何キ口お!? 体重的な意味で」

「ステータスでも開けりゃ分かるんだろけどさ」

「あ、そこは普通に返事するんですか」

「おっ」

圭子がわたたと手を四方八方に振っていると、彼女の目の前に何かの画面が現れた。

「出るのかよ!!」

なぜ出ているのかも分からない画面を彼女はカチカチのタッチしている。

「あった。四十キロぐらいだった」

「ぐらいつて、テキトーだなおい」

「もういいか？」

「最後に一つ。スリーサイズは？」

「書いてない」

「うっわっつまんね……」

「露骨に残念がるなよ……」

(目に見えないが)俺は肩を落としつつ、歩を進める。

まだ、モンスターはいないようだ。見渡す限りの平原は、草花がユラユラと風になびいているだけ。

「ステータス開きながら歩くと危ないぞ」

俺の言葉が聞こえていないのか、圭子はずっと画面から目を離さない。

「おい、閉じとけって」

「どうせ何も無いんだから、大丈夫だろ」

「はあ、そうかい……」

俺ことカンオケがため息をついた。
何が心配かって。カンオケのまま町に入ることが一番の心配だった。

町に着いたらすでに世界の危機

復活の泉が、なぜかフィールド場に放置されていたので、俺は復活しました。

町の看板に、ものすごく不穏な文字が書かれていた。

「世界滅亡の危機です。どうか力を貸してください」

は？

「これ、どういうこと？」

「ゲームのストーリーじゃない？」

二人してウンウン唸っていてもラチが開かず、そのまま町の中に入っていく。

中央に行けば行くほど、騒ぎ声が聞こえてくる。
人が集まっているようだ。

「はい、では次の方へ」

マイクに当たった声があった。
ん？

「なにあれ」

「漫才か？」

人ごみの真ん中のステージに、二人の男が立っており、間に挟むようにマイクが立ててある。

「でね、僕、見たんですわ」

「ほお、なにを？」

「恐竜トゴトゴドン」

「逃げな！そこは逃げとこか！？」

「ですね、それを僕が食いました」

「どうやって食うてんな！」

「あ、食われたんでした」

「じゃあなんで生きとんねん！もうやってられませんか」

「「どうも、ありがとうございました」」

え？

世界の危機なのに、なんで漫才やってんの？

「次は、このお二人です」

司会らしき人物が、次の二人組みを呼び出す。

「おい、どういうことだよ」

「とにかく、行ってみようぜ」

人ごみに駆け込み、話しかけやすそうなお兄さんの肩を叩く。

「あの、これって何してるんですか？」

「これ？これね、世界の危機を救おうとしてるんだよ」

「？」

「あの、審査員席の女の子がいるだろ？」

お兄さんが指差す先には、ムスツとした表情の女の子が座っていた。

可愛い顔をしているというのに、眉間にシワを寄らせて、漫才を見ても笑っていない。

「あの子ね、世界を破滅に追いやる破壊神なんだよ」

「破壊神!？」

「んでね、彼女を倒す方法はただ一つ、笑わせることだけなんだ」

「どうして!？」

「古代の書物に書いてたらしいよ。なんとか他の方法で倒そうとしたけど、太陽に送っても死ななかつたんだってさ」

「ええ……」

むちゃくちゃだ。

「彼女を倒すほど笑わせられた勇者は、賞金9999億ゴールド貰えるんだってさ、すごいよね」

「金カリストかよ……」

「おい」

圭子が俺の腕に肘うちをした。

「参加しようぜ」

「やだよ、恥ずかしい」

「いいから、行くぞ!」

彼女は俺の腕を掴み、人ごみをかき分けて、受付らしき場所に連れて行く。

受付のお兄さんが、こちらを見る。

「参加するのかい？」

「はい」

「じゃあ、次に出てくれ」

もう誰も出ないらしく、ステージの横に列は無かった。すぐにステージに立っている二人が終わり、俺たちの番になる。緊張でガクガク震えていると、圭子が耳に口を近づけてきた。

「まず、お前が登れ」

「ええ！？ やだよ……」

「いいから。オレに作戦があるんだ」

司会が次の組を呼んだので、もう自暴自棄になりつつもステージに駆け上がる。

「きつ、北田広太です！ よ、よろし」

「ブツ、アハハハハハハ！！ ふぐほう」

俺がステージに上がって挨拶していると、破壊神が突然笑いだし、血を吐いた。

「なんでだよ！」

「だって、だってブツサイク……ごはっ、ぶふっ、ヒィーヒヒヒヒ！！ ハアーハッハッハ！！ フオカヌボウ」

破壊神は俺の顔を指差して、口から血を吐き散らしながら腹を抱えて爆笑している。

「もう、死ぬ！！ 笑い死ぬ！！ アーハハハ……ガクツ」

さんざん顔を見て笑ったあと、破壊神が力なくうなだれた。

「優勝は、北田広太選手です!!」

司会が俺の腕を持ち、高々と掲げる。

一斉に歓声が沸き起こった。

どうやら、俺の顔で笑い死んだらしい。

「胸くそ悪いわ!!」

ステージから飛び降り、審査員席へと走る。

そして破壊神の胸ぐらを掴んで、その可愛い顔を何度もひっぱたく。

「起きろ!! 謝れ!! 俺に謝れ!! くそっ、これだから三次元女は嫌いなんだ!!」

号泣しつつ何度も殴り続けると、破壊神のまぶたがかすかに動いた。

「生きてんのか!? おい!?!」

「う、うるさいよぉ……もう少し寝かせ……ブツ、アーハッハッハハハハハハハ!!」

生き返ったと思ったら、また笑いだした。

「あ、やべっ、力が、力が抜けるううう……」

などと呟いたあと、破壊神の体がドンドンと小さくなっていった。胸も何もなくなり、最終的に、小学校ぐらいの身長になる。

「ヤバい、破壊神のちからなくなっちゃった」
「え？」

合わなくなつた服から破壊神がポロツと脱げて、地面に落っこちた。

「どうしてくれんのよう！」

「は、破壊神が……ロリに……」

「せきにんとりなさいよう！」

幼女になつた破壊神が、ワーキヤー騒いでいる。
裸で。

気がついて、すぐ服を破壊神に投げる。

「あぶつ」

「来いよア ネエエエエエス！！ 健全少年育成法なんか捨てて
かかってこい！！」

「うるさいわよう」

耳をおさえていた破壊神だが、ブルツと体を震わせると、腕を胸
の前で組んだ。

「さむいわよう。ふくが、ほしいわよう」

「人の顔見て笑つたんだから、それぐらい我慢しろ」

「かお……？ ぶつ、キャハハハハッ！」

また笑いだした。

「おもしろいわよう！」

「そうかよう……」

なんだか悲しくなってきた。

「あの、君」

「はい？」

声がかげられ振り向くと、村長らしい風貌の爺さんが立っていた。

「君キミ、破壊神を引き取ってくれんかね」

「ええ〜……」

「どうやら力も消えたようじゃし、安心じゃから」

「いやですけど」

「そうか、よく言ってくれた。彼女の分のゴールドも」

「ちよちよ、ちよつと！」

「ん？ なにかな」

「なにかな、じゃねーよ！ いやだっつってんでしょ！？」

「こんなに器の広い方は初めてじゃ。ありがとう。あそこの袋に賞金が入っているから、取って来るといい」

「都合の悪いとこだけ聞き流してんじゃねーよ！」

とにかく、賞金の袋を持って、圭子の手を引っ張って逃げようとする。

「まちなさいようー！」

ズボンが掴まれ、ゆっくりと後ろを振り返る。

「わたしもつれていきなさいよう」

「いやだよ、子供嫌いだし」

「ごどもじゃないわよう！ おとなだよー！」

「だって子供じゃん」

「ちからがなくなっただけなのよう」

「とりあえず、裸のまま掴むのは止める」

「いいじゃないのよう」

「俺の隣で欲情している奴を見ても言えるか？」

チラツ、と横目で確認すると、圭子がハアハアと息を荒くし、今にも破壊神につかみかからんとしていた。

その獣に、破壊神をピクツと驚く。

「や、やっぱりふくをきるわよう」

「そうしてくれると助かる」

ロリの次は奴隷が仲間になるのか……（前書き）

もう真面目に書くのは完全に止めた

ロリの次は奴隷が仲間になるのか……

「かわいいわよう！」

破壊神が、ミニス力を履いて嬉しそうに飛び回っていた。
俺の横で、圭子が息を荒げている。

「はあ……可愛い破壊神ちゃん……抱きしめてペロペロしたい」
「おまわりさんこいつです」

さすがに犯罪の臭いがしてきたので、警察を呼ぼうと動く。
破壊神が俺の腕にしがみついていた。

「えへへ、こつたはやさしいわよう！」

童貞なら勘違いするセリフを言ったあと、俺の顔を見上げて、

「キャハハ！」

と、また腹を抱えて笑い始めた。
そんなに面白いか。俺の顔は。

「いいなあ、広太だけ……」

よだれを垂らしてこちらを見る圭子の顔面を殴り飛ばしたあと、
破壊神を腕から離す。

「そういうことしてると、変な奴に襲われても知らねえぞ」
「だいじょぶだわよう！」

「ほんとか？」
「ほんとだよ」
「信用できん」
「しんよーしてよう。かわりに、いいことおしえるわよう」
「いいこと？」
「どれーをかえるおみせがあるのよう」
「奴隷!？」
「そうよう。さっきもらったしよーきんで、どれーをかつたらどうなのよう」
「マジか……」

半信半疑だが、破壊神から店の場所を教えてもらい、その店に行く。

入ったら、板前みたいな格好のオヤジが出迎えてきた。

「へいらっしやい！ 新鮮な奴隷が入っとりやすぜい！」

ここまで違和感があると、どんな反応をすればいいか困るな。

「とりあえず、いろいろ見せてください」

「はいよ！ こちらですぜ」

奴隷商人とは思えないほど威勢のいいオヤジに連れられ、店の奥へと入っていく。

いかにもな、場所に着いた。

壁はなく、代わりに牢屋の鉄格子ばかりが見える。

「たくさんいやがるでしょう？ これだけの上玉の中から好きに選

「んてくだせえ」

「じゃあ……」

「あ、この子良くね？」

いきなり圭子が割ってはいってきた。

そして、一つの鉄格子に顔を近づける。

「なんで奴隷を見て、そんなにテンション高いの？」

「いやいや、この子はマジだって、だってほら」

中を覗くと、青い髪の女の子が座っていた。

目がややつり上がり、気の強そうな印象を受ける顔だ。

胸もかなり大きくて、ボロボロの服から肌が透けてみえる。

「オレ、この子とイチャイチャしたいんだけど」

「お前、今女なんだって分かって言ってるか？」

「百合いいね」

「見る方の気持ちにもなってほしいよ……」

「見るのかよー!!」

「当たり前だろ。美少女同士の百合プレイだぞ？　そうそう見れるもんじゃない」

「親友であるオレを、お前はそういう目で見るか」

「いかにも」

胸を張って答えると、圭子は深くため息をついた。

「分かった、好きにしるよ……。んじゃ、この子を貰うよ」

「まいどありー!!」

オヤジが鉄格子を開けて、手早く首輪を女の子にハメる。

そこから伸びる鎖を圭子が持たされた。

「1万ゴールドになります」

「はいはい」

多分、大金なんだろうけど、全く痛手じゃなかった。

「こつた、こつちくるわよう!」

幼女に呼ばれて、駆け寄る。

破壊神が、鉄格子の中を指差している。

「かっこいいわよう!」

「かっこいい?」

意味が分からずに覗くと、片目に眼帯を付けた女の子がいた。黒い髪が腰まで伸びている。

体は全体的に細めで、簡単に折れてしまいそうだ。胸はない。ペ
つたんこだ。

「……かっこいい、ね」

つまり、眼帯を付けている、ということがかっこいいのだろう。
中二センスくさいが、オヤジを呼ぶ。

「この子を」

「へい、1万ゴールドになります」

「え? もしかして、全員1万ゴールドだったりします?」

「違いますよ。あそこの鉄格子は100万ゴールドです」

オヤジが顔を向けた先を見る。
そこには、赤茶けたかなり長い髪をいじる女の子が閉じ込められていた。

「あれは、王族の血筋でしてね。まあ、魔法に特化してんですけど。戦闘では、いいアタッカーになりますぜ」

「はあ、なるほど」

オヤジに1万ゴールドを渡し、その女の子の鉄格子へと近づく。
腰を落とし、視線を合わせると、彼女はプイツとそっぽを向いた。

「あもう、こちら振り向いてくれませんか？」

「いや……」

女の子は呟いた。

「どうせ、奴隷なんか買う奴にロクな奴はいないわ。なら、死んだ方がマシよ」

「確かにロクでもないな」

圭子が笑いながら言うが、気にせずオヤジを呼ぶ。

「買つよ」

「へい、100万ゴールドです」

「はい」

手渡すと、オヤジが鉄格子を開け、中の女の子に首輪を付けた。

「これで、これはあなたの物です」

鎖と、首輪のカギを渡される。
そして、

「なっ!?!」

首輪のカギを開けた。

「な、なにしてるんです!?!」

「いや、SMの趣味とかないから」

「で、ですがねえ」

「いいか、言わせてもらっぞ」

俺は、オヤジを睨みながら、女の子を指差した。

「美少女に必要なのは鎖じゃねえ。可愛い服なんだよっ!?!」

ツンデレっばいんだけど、なんか違う

その場の全員が啞然としていた。

「い、いいの？」

女の子が、俺の顔を見て呟く。

「ああ、もちろん」

「……そう。で、でも、礼は言わないんだからね」

「なにこれツンデレ？」

「ツンデレってなによ？」

「いや、いいんだ」

なんだかドンドン恥ずかしくなり、奴隷の店からサッサと出て行った。

とりあえず、全員の首輪を外しておいた。

「で、名前は？」

近くの公園で、六人揃って芝生に座る。

こうして見ると、俺以外女の子しかいないな。圭子も含むが。

「あ、あたしは、クリス……」

100万ゴールドの値を持つ女の子が、少し顔を赤くしながら言った。

「私はステアだ」

青い髪の巨乳が、こちらを睨みつけるように言った。

「し、シィはシィです……」

眼帯の女の子が、俯いて言った。

「個性的すぎるな……これ」

圭子が呟いた。

確かに、最初から、ツンデレ、クーデレ、えっと、中二病？ だからな。

「デレてすらいないし、デレる余地がなさそうだけだな」

「ま、奴隷と主人だしね……」

少々、現実の厳しさを痛感した。

「ちょっと、その巨乳」

「巨乳ではない、ステアだ」

圭子が言うと、ステアが怒り気味に言った。

「今日から、ステアはオレの性欲処理係な」

「は？ お前は女ではないか？」

「レズだよ、レズ」

「私にはそういう趣味はないのだが」

「いいじゃん、胸揉むくらい」

「胸揉むだけなら……大したことはないが」

「ならキスしていい!? 舌入れちゃったりして……ハアハア」

興奮しだしたぞ、おい。

完全にステアがドン引きしていた。

「……あ、あたしは何すりゃいいの?」

クリスが、まったくこちらを見ずに呟いた。

「あー、うん。食事とか作ったり、掃除したりしてくれるなら」

「えっ、それだけでいいの?」

驚きの表情でこちらを見る。

「いや、性欲処理係とか言いたいところだけどさ」

「うわっ」

「そういう反応になるでしょ? 嫌がる女の子を襲う気はさすがに無いしさ……。だから、せめて……」

ああ、言いくいなあ。

「せめて?」

「……俺の奥さんになってくれたら嬉しいなあとか……うえへえ」

「お、奥さんっ!?!」

「あ、嫌ならいいんだけど」

「やっ、やるわよ! ベっ、別に奥さん役くらい! すすっ、好きでもないけどね!」

「典型的ツンデレだなあ……」

また耳まで真っ赤にして、そっぽを向かれた。
が、いそいそとこちらに寄ってきて、腕を組んでくる。

「これでいいの？」

「これ、カップルのやることじゃね？」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「……そのままでもいいよ」

胸が当たってて、気分いいし。

「そうなの……？」

「うん……うん」

なぜか、腕の締め付けが強くなってきていて、痛いんだけど。

「カップルみたい……ね」

あ、今、バキッ、っ音が。

「初めての彼氏が……こんな不細工なんて……」

「く、クリスちゃん？（裏声）」

「や、やめてよ、その呼び方、恥ずかしいし」

「……あのね、もうちょっと離れてくれないのよ？」

「奴隷でしょ？ なら、主人である広太様の言うこと聞かないと」

バキバキと腕が鳴り続ける。

え？ 俺、まだ死ねないの？

「うぎっ……主人の命令でっ……は、離れて……」
「そ、そんなに嫌なら離れるわよ……」

心底残念そうにしながら、クリスが腕を解放してくれた。
俺の腕が変な方向に曲がってしまったている。

「は、はは、クリスつて、意外に胸あつたね……」
「ばっ、馬鹿にすんな!!」

褒めたつもりなのだが、クリスの張り手が俺の頬にヒットした。

広太は、死んでしまった!

「なんでやねん!!」

つい関西弁になってしまう。

「ちょまつ、腕を折られて生きてたのに、張り手一発で死ぬのかよ
!」

「だ、大丈夫? 広太様?」

「大丈夫なわけあるかい! 死んどんねんぞ!」

「え?」

「ああ、広太な」

いつの間にか、ステアに膝枕してもらっている圭子が言う。

「一発でもダメージ受けたら死ぬんだよ」

一瞬、四人の間に静寂が訪れた。

シィと破壊神がキヤツキヤと楽しそうに遊んでいる。

「ほんとうに!?!」

「ほんとほんと。肩叩いただけで死ぬから」

「そんな情報いらなから復活させてくれ!?!」

たしか奴隷情報に、クリスは復活魔法を使えると書いていたはずだ。

カンオケになりながら、期待の眼差しでクリスを見つめていると、

「ふふっ、いい身分ねっ」

なぜか、クリスがカンオケになった俺を踏みつけた。

「どう? 奴隷に踏みつけられる気分は?」

「あ、あの、クリスさん?」

何か、変なスイッチが入ってしまったようだ。

「ククッ、奴隷はあなたのようね。今日から、あたしが主人よ!」

なんか嬢王様になってるウウウウウ!!

「番外？」ロリの破壊神と眼帯つけたシィ（前書き）

9割セリフです

「番外？」ロリの破壊神と眼帯つけたシィ

広太たちが、なにやらドタバタしてる間の破壊神とシィの会話。

「シィちゃんは、わたしのおともだちなのよう！」

「いいよ、友達ね」

「でも……シィちゃんはおっきいから、どっちかっていうとオネーちゃんなのよう」

「そうかなあ。シィ、オネーちゃん、おっきいかなあ」

「オネーちゃんなのよう！ シィオネーちゃん！」

「あ、そういえば、あなたから名前聞いてなかったね」

「みんなからは、はかいしん、ってよばれてるのよう」

「破壊神？ うーん、女の子っぽくないから、シィと、もっとちゃんとした名前考えよっか」

「ちゃんとしたの？」

「うん。やっぱり、破壊神は物騒だよ。……そうだねえ、うーん」

「オネーちゃんがつけてくれるなら、なんでもいいのよう！」

「なんでもって言われると、逆に困っちゃうなあ」

「じゃあ、かつこいいのがいいわよう！」

「かつこいいの？ うーん、破壊神……破壊……ブレイク……イク

……イクちゃん！」

「イク？」

「うん、かつこいい……くはないけどね」

「イク！ いいなまえなのよう！」

「ありがとう。気に入ってもらえて、シィも嬉しいよ」

「シィオネーちゃん、ありがとうだわよう！」

「ふふっ、どういたしまして」

「なまえももらったし、あそぼっよう！」

「そうだね。シィと遊ぼっか？」

「あそぶよう！」
「なにしようかな？」
「むう……………」
「うーん……………」
「そつだ、おてだましようよう！」
「お手玉？」
「そつよう！ ほらっ」
「あ、お手玉が出てきた！ すごいすごい！ さっきのって、魔法？」
「まほうなのよう！ テレポートのまほうよう！」
「小さいのに、イクちゃんってスゴいんだねえ」
「はかいしんなのよう！」
「あはは、そうだったね」
「でも……………もうほとんどチカラはのこってないのよう……………」
「……………？ どうして？」
「こうたにわらわせられて、チカラなくしちゃったのよう」
「笑わせられて？」
「わたしのゆいーつのジャクテンなのよう」
「あらら……………」
「だから、せきにんとらせるために、こうたについてってるのよう」
「大変だねえ」
「たいへんなのよう」
「ま、頑張ろうね、お互い！ シイは、奴隷だけどさ」
「シイオネーちゃんは、もうどれーじゃないよう！ わたしのオネーちゃんだよー！」
「ありがとね、イクちゃん」
「えへへ」
「じゃっ、遊ばー！」
「うんー！」

その背景に、広太はクリスに踏みつけられ、
圭子がステアにキスを迫っているという絵面があった。

成績の良い部下に対して危機感を持たないと社会的に死ぬから気をつける

町外れの復活の泉にカンオケのまま落とされた。
復活し、水面まで泳いで顔を上げる。

「ぷはっ！ あっ、いたっ、足つつた！！」

「バカかお前……」

圭子が、俺を投げるように引つ張る。

そのまま泉から飛び出し、顔面から着地する。

「うえ……痛い……」

涙目になりつつ、すぐる目をしてクリスを見る。

あ、逸らされた。

「なによ」

「汚れたから拭いてくれない？」

「ハンカチ無いから無理よ」

「さいですか……」

そういえば、この子には服以外は何も買っていないのだった。

……。

今から数時間前だ。

カンオケに鎖をくくりつけて、六人は服屋へと向かっていた。

「さすがに、この格好は恥ずかしいからね」

クリスが自分の胸を片手で隠しつつ言う。

「どうやって、この子は俺のカンオケを引いてるんだろっ？」

「ここですね」

シイが、一件の店の前で立ち止まった。

ほう、服八靴店か。

「って、シイちゃん、ここ靴屋じゃねえか!!」

「あ、そうみたいです。……チツ、紛らわしい」

「なんか本性現し始めたんですけど、怖いんですけど」

「そんなことないですよー」

「じゃあ、まずは俺に乗せてる君の片足をどけようか」

チラツと見えたシイのお尻には布らしき物はなく、明らかにノーパンだった。

危うく、見ちゃいけない物まで見るとこだったぞ。

「いい高さだな、これ」

「ステアさんまで乗らないでください」

「座り心地もいいわよ」

「うおいクリス！ 重いから！ 座らないで！」

「やっぱり昼寝が一番ですねえ」

「シイちゃんも、うつ伏せに寝ないでよ！ あ、やっぱりペッタン
コだ」

死語を放った瞬間、奴隷三人が片足を上げた。

「やつとどけてくれ……え？」

上げたまま、動かない。

三人が目配せし、

「せーのっ！」

というクリスのかけ声で、

「「「チェストオオオオオオ！」」「」」

「ふぼほうー！」

ドゴツー！と、三つのかかと落としが降り注いだ。

「お、オーバーキルかよ……！」

「胸の話は、あたし達の前じゃ死語よ」

「つか、主人に何してんの!？」

「はあい、ごめんなさいご主人様あ」

「うわ、今のはイラツとした！」

「あたしい、イマドキのギャルだから分かんないんですう」

「いつだよ！ どんだけ昔なんだよ！」

「はいはい、下僕は主人に口をきかないでね？」

「立場逆転してんじゃねーか!！」

さすがに、奴隷を買っておいてコレはひどい。

服屋を見つけ、そろそろと六人が入る。

「あ、広太様！ こっちこっち！」

「クリス……えらいハシヤいでんな……」

彼女のところまで行くと、

「ねっ、似合うかな？」

満面の笑みを浮かべ、自分の体にレースの服を重ねてみせた。

「い、いいんじゃない？」

「反応が薄いわね……広太様は何がいいのよ」

「あの、一ついい？」

「なに？」

「敬語でもないのに、様付けっておかしくね？」

「別に、あたしの勝手でしょ！ ……奥さんだし」

「え？ なぜ奥さんなら様付け？」

「だって、夫には敬意を見せなければならぬって小さい頃に教わったのよ」

「どこに敬意があるんだよ……」

「広太様って呼んでるし……、……、……」

「他に無いなら言うなよ！」

「うるさいですね！ いいじゃないですか！」

「無理やり敬語になるな！ 違和感あるわ！」

「肩、お揉みしましょうか！？」

「半強制的勢いで迫るな！ もう、サツサと服決めちまえよ！」

「分かったわよ……」

クリスマスはどんどん煌びやかな服の並ぶ中を進んでいき、俺をそれについていく。

垣間見えた値札が「4000ゴールド」とか書いていて、背筋が寒くなった。

「な、なあ、クリスマス？」

「なによ、広太様」

「服ってさ、安いのでいくらするんだ？」

「おかしいこと聞くのね。10ゴールドくらいよ」

「ここ、超ブランドじゃねえか！！」

「へ、へえ」

「広太様って、かなりお金あるでしょ？」

「かなりあるけど」

「あたしの値を見て悲鳴もあげないなら、それだけの金持ちなのよね？」

「さあ、どう話そうか。」

まさか、自分の不細工顔を笑われて、お金カンストしたなんて言えないし。

「そ、そういつことだよ」

「どこか、由緒ある血族の出なの？」

吐き捨てるほどある血族です。

「あはは、そういつことにしてくれ」

「ふーん、ぶさ………冴えない顔してるのにねえ」

「はは、………後ろから襲ってやるうかこのクソ女」

「CQC出来るから、後ろから襲っても無駄よ」
「お前もかよ！ 圭子も出来たぞ!？」
「へえ、あれ、結構めんどうなのになえ」

クリスが、「3000ゴールド」の服を手にした。

「どっ?」

「どっって言われても、俺に服のセンス無いし」

「……そう」

「クリスの好きなように買えばいいよ?」

「……あんたに選んでもらわないと、意味ないじゃない」

「なぜ俺?」

「よくよく思ったけど、あんた耳いいわね」

「百メートル先に落ちた針の音さえ聞き取る男、スパイダーマ!!」

「それは良すぎでしょ」

「普通にツッコまれた……」

ま、別にどんな返答か期待してたわけじゃないけど。

「とにかく、これだけ買っ」

「下着無しでいいなんて、お前、相当な痴女だな」

「あっ……!!」

クリスが服抱きしめたまま顔を赤くしてしまった。

「わ、分かってるわよ……」

「俺が選んでくるよ」

「うわっ、最低!」

「最低で結構! 俺が選んだ下着を美少女が着る、それが人生最大の喜びなんだよ!」

「服は選ばないのに下着は選ぶの!?!」
「そうさ! ひたすらに下着を舐めたあとに美少女に渡す!」
「キモい!?! ここまでキモいと、あたしでもドン引きよ……」
「その下着で俺に抱かれてくれ」
「死んでも嫌よ!?!」

いいね、いいツンデレだ。

「下着はあたしが選ぶわよ!」
「選んだら持ってきて」
「どうして?」
「舐めるから」
「もういい!」

心底うざそうな顔をして、クリスは俺から逃げるように駆けて行った。

からかっただけなのになあ。

「じゃあない、俺も戻るか」

アイツは俺の嫁、ただし二次元に限る

「クリスは、どこにいる？」

血のまみれた王室間、生臭い臭気が漂う中、二人の男が対峙していた。

片方の男は、その身を粉塵で汚しているものの、一切の外傷を負っていない。むしろ、傷つかなくしているような必死がある。

彼の顔は、苦渋で歪んでいた。

「彼女なら、僕の部屋にいるよ」

その彼に対峙する男は、砂泥でまみれた王室にしながら、傷どころか汚れ一つ無く、まるで今まで戦ってこなかったような余裕さがある。その笑みから察せられる。

汚い男は、綺麗な男を睨み、腹の底から吠える。

「お前だけは……ぶつ殺オオオオオすツツツ！！」

「たった一撃で死ぬ身でありながら、神速の剣を持つ僕に戦いを挑むか！ かかってこい。その一撃を、この上ない痛みにくれよう！！」

両者が足を上げると、一瞬にして王室が爆発した。

……。

「みんな、揃ったか」

「おう」

俺の目の前には、奴隷用の汚らしい布ではなく、女の子らしい服装の三人がいた。

「なんか……恥ずかしいなあ」

クリスが、ひらひらとしたスカートを指でつまみながら、そわそわしている。どこかドレスのようで、とてもクリスに似合っていた。その長い髪が舞い、クリスが微笑んだ時、俺は不覚にもドキッとしてしまった。

「やはり、軍服の方がシャキツとするな」

ステアは……軍服？ 将校が来ていそうな青い制服を着ていて、下は上に合わせた感じの青いズボン。右腰には鞘に納められた短剣がささっている。

圭子が横でブーブー言っているが、無視を決め込んでいた。

「うん、いいねえ」

シイと言えば、ゴスロリをミニスカートにした服を着ている。ひらひらにひらひらが重なって、可愛いのだが……。間違いない。あれ、アニメにいたぞ。

「ありがとね、イクちゃん」

腰を下ろし、シイは破壊神に視線を合わせて、その頭を撫でた。

破壊神が嬉しそうに笑う。

「にあつてるよう!」

「そうだよ、イクちゃんが決めてくれたんだもんね」

と、不可解な単語を耳にした。

「イクちゃん、って?」

「あ、広太様は知らないんですけどね」

シイが小さな破壊神の体を抱き上げる。

「この子の名前、破壊神じゃ可哀想ですし、だから名前を付けてあげたんです」

「なるほど……」

仲が良さそうに笑う二人を見て、俺も笑う。

「さて、じゃあ行きますか」

柏手を叩き、切り出す。

みんなから賛成の声が拳がり、俺たちは店から出た。

……。

ついでに町からも出た。

そして、泉で復活し、今に至る。

そう、みなさん忘れていると思うが店で起きた一連の出来事、

俺、全部カンオケの姿でやってましたから。

かなりシユールだ。

カンオケが美少女に囲まれて、服の話で盛り上がるって……。

「さてと、どうする?」

「そうね」

クリスが話す。

「あたしの国に行ってもいいかしら?」

「国?」

「うん、戦争になって、慌てて逃げたから、今どうなっているか知りたいの」

「どう考えても潰れてるだろ……」

そこまで言っつて、急いで口を塞いだ。

「確かに、もう潰れて、無くなってるかも……」

クリスは悲しげな表情になり、肩を落とす。

「お、おいおい、そんなに落ち込まなくても」

「いいわ、行きましょう」

肩を落としたまま、クリスが俺の腕を掴んで引っ張る。そして、腕を無理やり組んだ。

「あたしが腰抜けだから、起きたことだから」

「え？」

どういう意味だ？

腰抜けだから？

いったい、クリスに何があったのか。

彼女は何も語らない。ただ、目を伏せながら、俺の腕を引っ張るのだ。まるで、何か支えがなければ倒れてしまつと言っているような。

支えるさ。

「ち、ちよつと！」

クリスの体を持ち上げて、お姫様抱っこをする。

彼女は耳まで赤くしてジタバタと抵抗するが、俺の腕は緩まない。これが、最強の力か。

「お、降ろしてよ……」

ついに涙目になるが、

「嫌だね」

一言言っただけで、クリスは黙った。

観念して、俺の首に腕をまわして、自らも抱きつく姿勢になる。

「お姫様、お姫様、お城はどちら？」

「……何もかも無くなった場所よ」

「無くなった場所？」

クリスは奇妙なことを言い出した。

「あたしの先祖が、先住民を追い出してまで手に入れた場所。そして、今はあたしの国も潰れたわ」

「だから何もかも無くなった場所、かあ」

「あたしにはあの場所に戻る資格は無いわ。でもね、どうしても最後に見たい物があるの」

「どんな？」

「お人形よ。お母さんが編んでくれた、手編みのぬいぐるみ。奴隷生活の間、あれだけが気がかりで、ずっと心配していたの」

そのまま、交わす言葉もなく歩く。

これが戦争の火蓋を切ることになるとは、誰が予想できただろう。たった一つの国が滅んだから？

たった一人の王女が生きていたから？

いいや、たった一つの大切な物があつたからだ。

こんな美少女だらけのパーティーにいられるか！俺は村に戻るぞ！

「宿屋……」

いったい、何キロ歩いただろうか。

樹海の中を、我らパーティーはそのそと進んでいく。

「つかれたのよう……こうたおんぶー！」

「はあ？」

ぴよんぴよん跳ねて、破壊神がおんぶと連呼している。

「嫌だよダルい」

「じゃああたしをおぶってよ」

「クリスはお姉ちゃんでしょ！ もう、いつまでも子供なんだから！」

「お母さん！？ そこでお母さん！？」

俺だつて疲れているというのに、クリスまでおんぶだと？ 殺す
気が……。

「私をおぶつてくれ」

「ステアさん、あなたはいろいろとダメです」

「むづ……なぜだ……。……体重が重いからか？」

いやいや、胸が大きすぎて、体制がキツくなりそうだからです。

「シイをおぶつて、広太様」

「あのね、シイちゃん。これだけの人数を断っておいて、君だけお

ぶるわけないでしょ」

「なら自分から行きます！」

と言つて、シイが俺の背中に乗った。

腰を曲げてしまい、受け入れる形になってしまつた。

「その手があつたわね！」

「ちょ、ちよつと！」

クリスが、俺の胸、つまり正面から抱きついた。

いや、キツいつて……これ……。

さすがに最強の力でもキツい。

「わたしはかたぐるまよう！」

「ぐふつ！」

小さな体のどこにそんな力があるのか、破壊神は驚異の跳躍力で俺の肩に両足を置いて、肩車をさせてくる。

「あうあう……。あんいほふへひい（何にも見えないい）」

シイちゃん、これ破壊神のお尻に顔うずめちゃってんじゃね？

「わ、私は……」

「ステアこのやるー！ もう無理なの分かって言ってるな!？」

「ううん……」

「おいおい、どこに乗れるっていうんだよ……」

「頭？」

「殺す気満々じゃねえか!?!」

首の骨がイキそうだ。

「ああ……羨ましいな、広太」

「圭子よ、本当にこれが羨ましいか？」

全体に30キロ以上の体重がかかってるって、常人ならどこか壊しかねない。

「なあ、ステア！」

「だが断る」

圭子が爛々とした瞳でステアに近寄る。しかし、そっぽを向かれています。

「ああん、違うって！ おんぶして！」

「……嫌だ」

「でもおんぶしてもらってもんね！」

「なっ！？」

圭子は、俺とクリスがやっている正面からのおんぶを、ステアにしていた。

ただ、大きな胸に押し返されているのだが……。

「胸に顔をうずめるな！」

「ああああん！ ステアのおっぱいだいしゅきなのおおおおお

！！」

「変な声をあげるな気色悪い！！」

後ろから女の子同士のけしからん会話を聞きつつ、歩を進める。

「おっ」

木々の合間に、まぶしい光が入ってきた。
外だ！

「やった……やっとならぬ……」

「もうおんぶおしまいなの？」

「クリスさん、あなた、一応女の子なんだからね？」

「このままでいいもん」

「子供か！？」

「ううっ！」

駄々をこねて、クリスが俺の胸にすりすり顔を押し付けてくる。
そういえば、俺の手、クリスのお尻触っちゃってるけどいいの
かな？

「やんっ」

気づいてしまいましたか……。

「ど……う、触……てんのよ……」

「99%ぐらいお前のせいだと思うが」

「セクハラ」

「言いがかりはよせ」

「変態」

「変態はステータスだ」

「希少価値だ」

「なんでそのネタ知ってるの！？　ってか、変態には価値無いから
ね！？」

「このままおぶってよ」

「あのね、さすがにこれ以上行くと俺死ぬから」

「死んじゃえバインダー」

「そこまで言うか!? ……キャラ変わってきてんぞ、お前……」

「嘘だツツツ!!」

「ニコ動好きなのな、お前……」

三分の二はひぐ しネタだったが。

「とにかく、三人とも、俺から降りなさい」

「うう……楽だったのにい」

「ありがとうございます、広太様」

「な、なんかおまたきもちよくなってたのよう」

「破壊神よ、マジで消されるから止めてくれない?」

今回、下ネタが多すぎる。

「とりあえず出られたわけだが」

「おっぱい気持ちいいのおおおお!!」

「黙れ変態!!」

圭子が未だにステアに抱きついていて、声を荒げている。

「どうしてこう、まともな女の子がいないんだ……」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「口揃えて言っつてんじゃ……最後の一人誰だよ!?!」

明らかに一人多かつたぞ、今の。

「ってか、こういうメタ発言、許されるのか？」

「ゲームだか」

「もういい」

この流れは、いつの間にかツッコミになっている俺にとっては不毛な戦いだ。

圭子がボケに回ったせいで、普段ボケのはずの俺がやらなくちゃいけないようになってしまった……。

「あ、ホテルあった！」

「え？」

クリスが嬉しそうに笑い、顔を向けた先を見る。

おう、本当にホテルみたいだ。壁はピンクで、キラキラとした装飾があつて、【ホテル・夜のお楽しみ】と書かれてい……

「ラブホテルかよ!!!」

圭子がやつとツッコんでくれた。けどね、ステアのおっぱい揉みながら言われても、説得力ないのよ？

しまいには、ステアにゲンコツ食らわされて、叩き落とされてるし。

「おっぱい揉むくらいなら、って言ってたじゃん!」

「揉み方がおかしいんだ!」

「ええ……揉み方がおかしいって、どんな風によ……」

「そ、それは……」

あーあ、ステアさん、顔を真っ赤にしてもじもじしちゃってるよ。

「なんていうか……つまんだり……とか、……変な気分になってきてたつていうか……」

「ほうほう、それでそれで？」

「こ、広太様！？ 顔近い！！」

あまりにも興味があまりすぎて、迫りすぎてしまったようだ。

「赤面こそ最強だよな！」

張り倒されていた圭子がすくつと立ち上がり、親指を立ててきた。

「そのためにおっぱい揉んでたのか」

「おうよー！」

「……嘘だな？」

「どうしてバレた！？」

「もうボケ担当になれよ……」

あの頃の相方は、もう帰ってこないみたいだ。

「ラブホテルも宿屋みたいなもんだし、泊まりましたよ」

「あのねクリスマス、確かに宿屋かもしれないよ？ でもね、用途が違うからね？」

「あんたになら……抱かれてもいい……」

「女の子が簡単に貞操を差し出すんじゃないありません」

「……冗談に決まってんでしょ。誰があんたみたいなさ……不細工と」

「せめて言い直せよー！！」

「あたい〜ちよーそーいうの分かんないっていつかあ
「いい加減に古風なギャルはやめて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0941ba/>

転生でチートと化した俺が女体化した友達とゲームの世界で奴隷(+ 幼女)ハ-

2012年1月6日22時54分発行